

63 日本人青年女子の皮膚の色と衣服の色の適応色について

東京家政大 木曾山かね

1 視感測定も実用的で簡便であり、熟練すれば其の結果の信頼度も高いので本研究では視感測定により学生の皮膚の色を測定し、それら学生が各自、相互に其の適応色を求める資料とし、更に求めた其の適応色と皮膚の色との関係が色彩理論とどのような関係をもっているかを考察したいと考えた。

2 被実験者は369人、測定時期は昭和32、33、34年の6月の温度 $C 26^{\circ} \sim 27^{\circ}$ 湿度 $55\% \sim 70\%$ であり、測定個所は前額中央、前胸三角部中央とした。

適応色の求め方は基礎実験により撰んだ38色の色布を肩胸の周辺にかけて、5人以上をグループとして学生相互に批評し合い、考えさせて、求めさせた。

色布の色を標準光源下に於て比色器を用いて等色の色紙を求め、ない色は複元して、地合に左右されずに色のみを対象とする様にし其の分光反射率曲線をとり、其の2色の関係をみる資料とした。

3 皮膚の色で最も多かったのは10色で其の内の1色をマンセル色票に合せれば $YR 5.0^{6/2}$ よりやや彩度の

高い色と其の周辺の色であって、其の色群に対応する色は914求められた。これを分類すると17色で色相別にみると pR bG B. RyR 等で、R, Bの色群が多かった。彩度のひくい、高明度、低明度の類似色をえらんだものが多かった。